

ウンシュウミカン ‘大津四号’ の隔年交互結実栽培法における夏季せん定法と着花・果

新堂高広・貝原洋平
(佐賀県果樹試験場)Takahiro Shindo and Youhei Kaihara :
Effect of Summer Pruning on Flower Setting of ‘Ootsu 4 go’ in Systematized Biennial Bearing Method

高糖系ウンシュウミカンで新規に隔年交互結実栽培法を導入するに当たっては、結果母枝として揃った夏枝を発生させることが重要である。そこで高糖系ウンシュウミカンの ‘大津四号’ を用いて夏季せん定法の違いが夏枝の発生や翌年の着花・果に及ぼす影響について検討した。

1. 材料および方法

果樹試験場内の17年生 ‘大津四号’ を供試した。せん定は2001年7月10日に行い、刈り込み鋏による刈り込みせん定区 (以下、刈り込み区)、せん定鋏による通常せん定区 (以下、通常区)、摘果のみによる無せん定区を設定した。無せん定区以外の除葉率は約25%程度である。また、それぞれのせん定区に発芽促進のための BA 液剤 (300倍) 散布の有・無を設けた。

発生本数は旧葉100cm 枚あたりに換算した。着花数については翌年5月2日、結実率は6月26日に調査を行った。

2. 結果および考察

1) 夏枝の発生数はせん定のみの影響で比較した場合、通常区が最も多く発生した。また無せん定区は夏枝の発生数は3.3本であり、刈り込み区、通常区の半分以下の発生本数であった。平均枝長は通常区が最も長く18.6cmであった。一方、BA 液剤散布の有・無で比較した場合、散布区は無散布区に比べ、いずれのせん定処

理区でも夏枝の発生本数が明らかに多くなった。特に無せん定区の BA 液剤散布樹は夏枝の発生数が29.5本であり処理区全体の中で最も多かった。しかし、夏枝の平均長は13.4cm で処理区全体の中で最も短かった。

2) 夏枝の長さ別分布はせん定の影響だけでみた場合、刈り込み区で10cm 以下の短い枝の割合が高くなった。通常区は処理の中で30cm 以上の比較的長い枝の割合が高かった。BA 液剤散布の影響でみると無せん定区で10cm 以下の枝の割合が高く、刈り込み区で30cm 以上の枝の割合が高くなった。

3) BA 液剤散布を行った場合、総花数は無せん定区が最も多く、刈り込みせん定区と通常せん定区はほぼ同様であった。また、総花数に対する有葉花の比率は無せん定区が4.8%で最も少なかった。一方、BA 無散布区は散布区に比べ、総花数が著しく増加したが、せん定法の違いでは無散布区と同様の傾向がみられた。

4) 結実率は BA 散布の有・無に係わらず、無せん定区が最も低かった。BA 散布の有無で比較すると、散布区の結実率が高かった。

以上、夏枝の発生数や長さおよび翌年の着花の状態や結実率から考え、‘大津四号’ で新規に隔年交互結実栽培法を導入する場合のせん定法は、刈り込み鋏でせん定を行い、BA 液剤を散布する方法が最も良いと考えられた。

第1表 せん定法の違いおよびBA液剤散布と夏枝の発生 (2001.10)

処理区	枝数 (本)	平均枝長 (cm)	総着葉数 (枚)
刈り込みせん定区	BA 散布	13.9	148.8
	無散布	6.6	89.2
通常せん定区	BA 散布	21.0	185.2
	無散布	7.7	64.9
無せん定区	BA 散布	29.5	216.5
	無散布	3.3	30.8

第2表 せん定法の違いおよびBA液剤散布と着花・果 (2002.5)

処理区	総花数	有葉花率 (%)	結実率 (%)
刈り込みせん定区	BA 散布	73.1	8.5
	無散布	145.0	4.5
通常せん定区	BA 散布	74.3	7.1
	無散布	134.9	4.3
無せん定区	BA 散布	129.9	4.8
	無散布	203.0	2.2